

阿久津 秀雄 大阪大学名誉教授、大阪大学蛋白質研究所客員教授

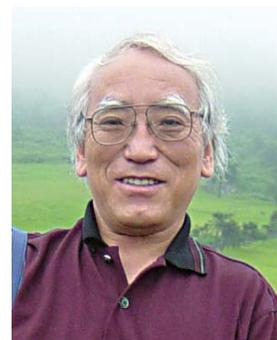
# 韓国における 大学イノベーション点描

朝7時、ソウルの冬の朝は寒く、暗い。しかし、ソウル大学の裏門ではラッシュアワーが始まっている。窓から眺める道には車の列が引きも切らない。この光景は現在のソウル大学の教員、学生、職員の意気込みと重なって見える。現在、ソウル大学は世界の一流大学へ駆け上ることを目指して、自信と活気にあふれている。わが国にごく近い韓国での教育・研究分野の動きは分子研の関係者にも興味ある話題だと思うので筆者のごく狭い見聞をお伝えしたいと思う。

筆者はWorld Class University(WCU)プロジェクトとの関連でしばらくソウル大学に滞在した。これは世界の優れた研究者を迎え入れて韓国の大学における教育・研究の質を短時間で世界レベルに引き上げることを目指した韓国政府の特別プロジェクトである。外国人教員を迎えての新分野大学院専攻の設立・運営、外国人教員参加の下での国際的共同研究グループの創設、ノーベル賞受賞者による教育・研究活動の活性化という3種類からなる。例えば、筆者の関係するソウル大学自然科学大学院「生物物理学および化学生物学専攻」は化学科中心の地元教員9名と外国からの教員6名の参加で創設された。

授業は韓国教員も含めて英語で行い、学位論文も英語で書く。この専攻の入試の重要な基準が英語であるので、授業における学生の英語理解にはあまり問題がない。英語でのコミュニケーションとなるとかなり個人差が出るが、日本に比べると学生の学習意欲は高い。

「漢江の奇跡」といわれる経済の急速な発展に支えられて、この20年くらいで研究を取り巻く環境は大きく変わった。以前はソウル大学でも博士の学位は外国で取る場合が多かった。今60歳前後になっている人達が学位を取り、ポスドクを終えて帰国したころは研究費が少なく、とても研究できる環境にはなかったとのことである。しかし、現在では政府の科学技術振興策に基づいてさまざまな研究助成金が出ており、経済界からの研究費あるいは大学への寄付は日本の比ではない。ソウル大学では毎年どこかの企業が寄付した建物が建設されている。このようにして、機器の整備と博士課程への進学率の上昇、外国人留学生の受け入れ、ポスドクの雇用が進み、欧米・日本と競争できる環境が整いつつある。この変化の速さは日本の高度成長期を超えるもので、韓国人研究者の自信の源になっている。それを示すのが、韓国人



阿久津 秀雄（あくつ・ひでお）  
 1972年 東京大学大学院博士課程単位修得退学  
 1972年 大阪大学蛋白質研究所助手  
 1973年 理学博士（東大）  
 1985年 横浜国立大学工学部助教授  
 1991年 横浜国立大学工学部教授  
 2000年 大阪大学蛋白質研究所教授  
 2004年 大阪大学蛋白質研究所長  
 2007年 大阪大学名誉教授、  
 大阪大学蛋白質研究所客員教授

のランキング好きである。つい先日、OECDの教育ランキングで韓国が多く  
の課題で1位、2位を占めて話題になっ  
たが、ソウル大学ではことあるごとに  
大学ランキングが出てくる。ある大学  
ランキングによれば、ソウル大学は数  
年前には世界で100位以下であったも  
のが一昨年には50位になり、昨年就任  
した総長は任期内の20位以内入りを目  
指している。この右肩上がりの経済に  
支えられた自信は今の学生や若い研究  
者に世界への雄飛の希望を与えている。  
朝鮮半島の政治的、軍事的緊張の中  
でも若い人々の表情は非常に明るい。  
わが国では忘れられつつあるハングリー  
精神がここには脈々と息づいている。

わが国も経験したことではあるが、  
急速な発展はさまざまな歪みをも生み  
出す。国からの教育・研究予算のかな  
りの部分は競争的資金になっているが、  
結果としてほぼ二つの国立大学と三つ  
の私立大学に集中する傾向にある。そ  
のため、大学間の格差が広がっている  
といわれる。もっと深刻なのは制度的  
歪みである。大学イノベーションの流  
れの中で、米国にならって、医学部  
には学士を持つ者のみ入学できる制度が  
数年前に導入された。薬学部も昨年度  
から6年制となり、他学部で2年の教育  
を終えたものが入学できる。今年2011

年3月に第一回の入学生を受け入れる。  
ところがこれらの制度改革は他学部の  
教育に予想もしない影響を及ぼしてい  
る。特に、化学系、生物系への影響は  
深刻である。医学部の人気は圧倒的で、  
レベルの高い大学の化学系、生物系の  
優秀な学生はほとんどが医学部を目指  
すようになった。学部でも薬学を目指  
して転身する学生がかなりの割合を占  
め、化学系、生物系専攻・学科は優れ  
た研究者・技術者を教育計画にしたが  
って社会に送り出すことに支障をきたす  
可能性が出てきている。これについ  
ては全国の教育機関から強い批判が出  
ており、制度を見直さざるを得ないの  
ではないかと言われている。韓国企業  
は日本企業に比べると意思決定が早く、  
行動力に優れていることはよく知られ  
ているが、政府についても同じことが  
言える。しかし、教育制度改革ではこ  
れが裏目に出ているように見える。

韓国の大学でも間接経費の獲得が  
重要な課題である。大型研究費を獲得  
するためには研究の質を上げる必要が  
あり、年々教員の採用条件は厳しく  
なっている。インパクトファクターの  
高い雑誌に多くの論文を出しているこ  
とが重要な要件となる。この点ではア  
メリカ帰りの研究者が有利になる。た  
だ、教員定員には女性枠があって、こ

れがかなりの強制力を持っているため、  
女性教員を増やす流れは定着している。  
もう一つ研究の質を上げるものとして  
サバティカル制度が採用されている。6  
年間勤務すると1年のサバティカルが  
ある。あるいは3年勤務して6ヶ月を  
選択することもできる。これを使って  
外国の研究室に滞在することが多くの  
研究者の望みだが、理工系ではグラ  
ントから来る制約や、学生指導の不安  
のため長期に外国に行くことは難しい  
という意見をよく聞く。安全策として  
国内の他大学、あるいは他学部  
に滞在する。または、サバティカル  
をとって授業から解放され、研究  
室で研究に専念することにも使  
われている。既述のWCU  
プロジェクトも教育・研究の質を  
上げる試みの一つである。

現在、アジアは急速な経済発展を遂  
げており、アメリカ、ヨーロッパと  
ともに第三の経済、文化圏を形成する  
ことが期待されている。しかし、韓  
国の目は主に米国に向いており、植  
民地支配の影響で日本への信頼感  
は一般民衆レベルでまだまだ低い。  
これまでの点描からも分かるように  
研究者のレベルでも事情はあまり  
変わらない。信頼関係の構築には  
まずお互いを個人のレベルで知  
りあうことが大切で、地道で息  
の長い学術交流の必要性を感じる。